

日本語とチェコ語における連体修飾の対照研究

カレル大学 日本研究学科 講師

金杉 ペトラ

これまで、日本語学の研究の枠組みで日本語の連体修飾が取り上げられ（久野 1973、奥津 1974、寺村 1992、松本 1997）興味深い成果を挙げてきた。ただし、これらの研究のなかで対照研究は比較的少なく（仁京 2014、横川 1999）、節による連体修飾の研究に偏っているように思われる。頻度多く使われている文の成分として、注視するに値すると思われる。

チェコ語と日本語との連体修飾を比較する際、まず目立つのは連体修飾を表す品詞における非対称性である。チェコ語では、形容詞による連体修飾が圧倒的に多いことに対して、日本語では形容詞・形容動詞以外に、動詞、名詞+連体修飾格助詞、擬態語+連体修飾格助詞というパターンも頻繁に見られる。認知文法の主張である品詞の意味的スキーマとの関係で非常に興味深いテーマだと思われるが、今回はまた別の連体修飾に関連する言語間の違いに関して発表したい。

連体修飾の基本的な役割は、チェコ語・日本語ともに、被修飾語に関する新たな情報を提供することである。被修飾語が表す概念をより明確にする役割を果たすことで、複合語の領域に接するという現象は両方の言語で見られ、形態論と統語論の連続性を補強する証拠でもあると思われる。ただし、その接し方には両言語間に重要な違いが認められる。この違いを認知文法の枠組み（Langacker 1991,2000,2008, 2015）で取り上げるのが本発表の目的である。

まずは、複合語に関する先行研究（Levi1978）の主張をチェコ語と日本語の言語データを背景に評価し、影山（2011）の複合語の特徴と意味把握モデルを紹介する。

形容詞と名詞が構成する、チェコ語の典型的な名詞句の幅広い使用範囲を実際の例を挙げながら（連体修飾～複合語）明確にし、チェコ語文法に挙げられている基本的な連体修飾の二種類（厳密連体修飾・自由連体修飾）とそれに相当する日本語の言語手段を紹介する（単語、派生語、複合語、名詞句）。チェコ語の名詞句は語彙と文法の境界線をまたいでいることに対して、日本語の名詞句は語彙的領域に収まる傾向にあることを述べる。認知文法の観点から両言語の形式を分析した上、それによる捉え方における差を示唆し、それぞれの形式の解釈に貢献するプロセスを明確にする。名詞句である構造体と複合語の基本的な違いをまとめ、複合化の背景にある文化的な影響を「権利」に関する語の例を使って説明する。チェコ語と日本語に整っている手段における非対称を主張し、日本語の類像性を指摘する。

最後に、日本語教育と一般言語学との繋がりを検討し、これからの課題を述べる。